町民一丸で未来創生と持続的発展に向けて歩む

厚真町長　宮坂尚市朗

新年明けましておめでとうございます。

2024 年の輝かしい新春を迎えるにあたり、町民の皆さまに謹んでごあいさつ申し上げます。旧年中は、皆さまから町政諸般にわたり特段のご理解ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

昨年は、本町に未曾有の災害をもたらした平成 30 年北海道胆振東部地震から５年という時を刻みました。順調に進む災害復旧事業や新型コロナウイルス感染症の 5 類への移行を受けて、ようやくご遺族並びに震災尽力者など多くの関係者をお迎えし、献歌の部を盛り込んだ厳粛な追悼式を挙行できました。改めて、犠牲となられた 37 名の方々を偲び、ご冥福をお祈り申し上げるとともに、復旧・復興とその先にある地域創生と持続的発展に向けた歩みを町民一丸となって進めていくことをお誓い申し上げました。発災からこれまでの間、全国・全道の関係機関から深いご理解と多大なご尽力を賜り、また、全国から寄せられた温かいご支援に重ねて心から感謝申し上げます。

町内では、人里に近い急傾斜地の安全確保と社会基盤の復旧工事は、概ね完了しています。森林再生については、令和８年度までを重点取り組み期間として、これまでの取り組みをさらに加速させていきますが、心のサポートや宅地耐震化事業については、引き続き丁寧な対応を心がけてまいります。

未曽有の困難にあっても、決して努力を惜しまず、夢を諦めない私たち厚真の町民ですから、一人ひとりの未来を切り拓く決意とご理解により、ここまで復旧を進めることができました。一方で、被災された町民の皆さまが抱える不安、悩みはこの短期間では、決して癒えることはありません。それぞれの不安をできるだけ軽減し、個々の課題解決のため関係機関や町民のご協力をいただきながら、被災者に寄り添い誰一人として取り残すことのない復旧・復興を目指して努力を続けてまいります。

また、震災の記憶を風化させることのないよう、教訓と復旧・復興の記憶や経験を町内外と共有し、継承していかなければなりません。昨年は、これまでの道のりを振り返り、改めて経過検証するシンポジウムを開催するとともに、被災者や尽力者の皆さまの貴重な証言集として復旧・復興記録誌も刊行しました。日本各地で繰り返される自然災害や甚大な被害が想定されている日本海溝・千島海溝、南海トラフにおける大規模な津波を伴う海溝型地震災害も注目されており、引き続き、命を守る防災・減災対策に全力で取り組んでまいります。

出口の見通せない国際紛争は、東アジアにおける安全保障への危機と物価・資材の高騰など、私たちの生活や経済活動に脅威をもたらしています。その一方で、

GX（グリーントランスフォーメーション）や DX（デジタルトランスフォーメーション）により経済社会システム全体の変革が進展しており、変化への対応力、強靭性・復元性を必要としながらも長期的な視点に立ち高度な循環型社会を目指す必要があります。

国においては新しい資本主義による経済拡大と安全保障の強化を目指していますが、食料安全保障という観点においては懸念がぬぐえません。災害復旧事業が一つの区切りを迎えているなか、本町では、変化を恐れず本格的に復旧から復興への取り組みに挑戦しています。いつ起きてもおかしくない自然災害に備えての庁舎周辺整備や防災・減災対策、エネルギー地産地消や省エネルギー・創エネルギー・吸収源対策を官・民・学で総合的に取り組んでいくカーボンニュートラル政策を展開し、着実に実装しながら復興の新たな骨格としてまいります。併せて分野別 IoT 技術の導入や Society5.0 など社会技術革新を取り込みながら次世代に向けて潜在力を耕し直し、可能性という羅針盤を掲げながら地域創生というハードルにも果敢に取り組んでまいります。

１次産業を基幹とする本町ですが、人材育成と関係人口の拡大、そして地政学的優位性を根幹として、原点回帰ともいえる人と人との繋がり、信頼と寛容、自然環境の回復に傾注しながら、新たな潮流を先取りしつつ、復興から創生へと歩みを加速させてまいります。

結びに、「変革・転機」や「激動」の年と言われる甲辰（きのえたつ）年が、明るく希望の持てる年でありますことと、町民の皆さまのご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げ、年頭のごあいさつといたします。